

2022年横浜ナザレン教会・三位一体後第六主日(7/24)礼拝

「教会が伝えるもの」

使徒言行録第5章 27 節から第 5 章 42 節

【聖書】

使徒言行録 5:27 彼らが使徒たちを引いて来て最高法院の中に立たせると、大祭司が尋問した。28「あの名によって教えるはならないと、厳しく命じておいたではないか。それなのに、お前たちはエルサレム中に自分の教えを広め、あの男の血を流した責任を我々に負わせようとしている。」29 ペトロとほかの使徒たちは答えた。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。30 わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木につけて殺したイエスを復活させられました。31 神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。32 わたしたちはこの事実の証人であり、また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証しておられます。」

33 これを聞いた者たちは激しく怒り、使徒たちを殺そうと考えた。34 ところが、民衆全体から尊敬されている律法の教師で、ファリサイ派に属するガマリエルという人が、議場に立って、使徒たちをしばらく外に出すように命じ、35 それから、議員たちにこう言った。「イスラエルの人たち、あの者たちの取り扱いは慎重にしてください。36 以前にもテウダが、自分を何か偉い者のように言って立ち上がり、その数四百人くらいの男が彼に従ったことがあった。彼は殺され、従っていた者は皆散らされて、跡形もなくなった。37 その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こしたが、彼も滅び、つき従った者も皆、ちりぢりにさせられた。38 そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、39 神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」一同はこの意見に従い、40 使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によって話してはならないと命じたうえ、釈放した。

41 それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、42 毎日、神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせていた。

1 信仰継承

先日、ある熱心なキリスト者が、ネットに、「主なる神はこう言われる。わたしは、再びイスラエルの家の願いを受け入れ、彼らのために行う。わたしは彼らの人口を羊の群れのように増やす。」というエゼキエル書の聖句を投稿し、次のようにコメントしていました。「主の約束を感謝します。私たちの信仰が継承され、子や孫が星の数のように増えていきますように。」確かに信仰者と教会の抱える大きな課題の一つは、次の時代を担う世代への伝道、特に自分の家族、子ども、孫たちへの伝道でしょう。家族への伝道は、非常に難しい、というのは誰しも実感すること。この方も、我が子や孫たちにイエス・キリストを信じて幸せに生きてほしい、と願っての事に違いないし、その気持ちは、よく分かります。

しかし、その思いが切実であればあるほど、「私たちの信仰が継承されますように」という祈りは、なんだか的をはずしているようです。何故なら、教会が今日まで世代を超えて引き継いできたのは、誰かの信仰ではなかったし、教会がこれから次の世代に引き継ぐのも、誰かの信仰ではありえません。教会が次の世代に手渡し引き継ぐもの、私達が伝えるべきものは、今日の前の聖書20節で天使が使徒達に「残らず告げ知らせよ」と命じた命の言葉、つまり、30節から31節で語られた主イエス・キリストです。「わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木につけて殺したイエスを復活させられました。神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。」

では、どのように私達はこの命の言葉、イエス・キリストを伝えていくことが出来るのでしょうか。その急所とも言うべき事柄は、続く32節「わたしたちはこの事実の証人であり、また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証しておられます。」にあると思います。今日はこの言葉を中心に我々がどのように次の世代にイエス・キリストを伝えて行くことができるのか、共に聖書の言葉に耳を傾けていきたいと思えます。

2 使徒とは

さて、32節で挙げられた「わたしたち」つまり「使徒達」とは、どのような人達なのでしょう。使徒とは、主イエスが夜を徹して祈り、弟子たちの中から選んだ十二人であり、主がガリラヤ地方で宣教を始めた頃から生活を共にし、主の神の国の言葉や奇蹟を最も近い場所で見聞きした人々です。そして、主イエス・キリストの逮捕と十字架の死に躓き、大きな挫折を経験しました。にも拘わらず、三日目に父なる神によって甦らされた主イエスは、使徒たちに訪れ、その後四十日間にわたって神の国について彼らに教え、聖霊が降る事を約束して、彼らの目の前で父なる御神の御許へと帰っていかれました。その十日後、使徒たちを中心とした祈る群れの上に聖霊なる御神が降り、使徒たちは主イエス・キリストの証人として主を

宣べ伝え、病の癒しなど、主イエスが今も生きて働いておられる証である「しるし」を行うようになります。このように見てきますと、使徒達は主イエスと同時代にイスラエルに生きた人々の中でも特殊な存在、いえ、人類史上でも特別な十二人であることがわかります。ですが、私達は、使徒たちが宗教的天才でもなければ、崇高な人格者でもない事を知っています。私達となんら変わらない普通の人々です。キルケゴールというデンマークの神学者は、天才と使徒との違いを述べて次のように語りました。「天才は自分自身によって、自分の内にあるものによってその存在があるが、使徒は神からの権能によってその存在がある。」—天才は、天才自身の才能によって天才ですが、使徒は、自分以外のもの、神からの権能によって使徒だ、というのです。その通りだと思います。だから使徒達が伝えるのは、自分達が考え出したり見つけ出したりしたものではありません。寧ろ、彼らが「きっとこうに違いない」と求めていた理想的なものとは全く別の形で現れた神の現実を伝えるのです。つまり、使徒たちは自分達の信仰ではなく、主イエス・キリストの十字架と復活の出来事を、神の国の訪れとして告げ知らせるのです。

しかし、41節は、どうでしょうか。「一同はガマリエルの意見に従い、使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によって話してはならないと命じたうえ、釈放した。それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行った」とあります。使徒たちが受けた「鞭打ち」とは、死者も出るほどの苛酷な刑罰であり、神の民には耐えがたい辱めだと受け止められていたようです。とても喜べるような事ではありません。ですから、ちょっと斜に構えれば、使徒たちは自分達の信仰を誇る為に喜んだふりをしたかもしれないし、ルカも使徒達の信仰の強さをほめたたえて記した、と言うふうにも読めます。そんなふうに関心を持って自分達の信仰を強く大きく見せるために無理する事は、教会ではある事ですし、私達の心の中にもそのような気持ちの種はあります。

しかし、使徒たちがそのようなことをした、とは考えられません。彼らは、自分達の信仰を誇ることが如何に空しいものか、惨めな結果しか生まないか、主イエス・キリストの十字架の前で痛いほどに思い知っているからです。ここでペトロが三度主イエスを否定した、有名な鶏鳴のエピソードを繰り返す必要はないでしょう。他の使徒たちもペトロと同じ。「主よ、主よ、あなたの行く所ならどこなりとついて行きます」と大声で言い立てておきながら、主イエスの十字架の前に恐怖にかられて逃げ去り惨めで辛い思いをした使徒達。そんな彼らが、再び自分達の信仰を誇る為に喜んだふりをする、とは考えられません。彼らは、この時、本当に喜んでいたのでと思います。

しかし、何故、屈辱的で苛酷なむち打ちの刑罰を受けて喜ぶたのでしょうか。それは、彼らがむち打ちを通じて、より一層主イエス・キリストを知ることができたからではないか、と考えます。彼らは、主が十字架に架かる為ゴルゴダの丘まで歩かされる前に、ローマ兵によって鞭打たれた主のお姿を見ていたのかもしれませんが。ローマ軍が使う鞭の先には釘がついており、それが主の皮膚に食い込み肉を裂いた、と言われていました。今、自分達もローマ軍の鞭ほどひどいわけではないけれども、主イエスのみ名の為には苛酷な鞭打ちを受け、痛みと

屈辱に喘いでいる。だが、自分達が今感じている痛みや恥は、主イエスが受けてくださったものに比べれば僅かなもの、主は、この何倍もの痛みや恥辱を、この私の為に、主を裏切る恩知らずの罪びとである私の為に耐えてくださった、私を罪から贖いだし、神の子として生かす為に、主がどれほど苦しまれた事か、どれほど自分達を愛してくださっていることか、まさに自分に加えられる恥と痛みを通じて、主イエスの深く高く強く広い愛、聖く義なる愛を知ることができた、だからこそ、使徒達は喜んだのではないのでしょうか。

そうして、彼らは主イエス・キリストの名代とされたのです。「名代」とは少し古い言葉ですが、「主人の名を名乗る事が許され、その人がすることは主人がすることと見なしてよい、と認められた家来」というくらいの意味です。弟子たちは、主イエスのみ名の故に、主の名代として辱めを受ける事となった、今は救い主、導き主として父なる御神の右の座におられる主の代理とまで見なされる者にされた事を、これ以上ない栄誉な事だと受け取め、大いに喜んだのです。使徒達の心には、「人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき、あなたがたは幸いである。その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。」と約束する主の御声が響き渡っていたに違いありません。

3 聖霊なる証人

しかし、私達は、呟いてしまいます。「そんな喜びは、主イエスを直接知っている使徒達だからこそ持てるのではないのか。現代に生きる私達は、地上での主イエス・キリストにお会いしたことがない、声を聞いたこともなく、匂いを嗅いだこともなく、手で触れたこともない。

使徒達のように主イエスを知ることは出来ないし、主の証人になる事などできない。」

確かに、私達が、使徒達とは決定的に違うのは、動かしようのない現実です。「使徒達のように主イエスに直接お会いできたら、もっとしっかりした信仰を持つことができるし、私たちの伝道も進むのではないか」と私達はついついそう考えがちです。

だが、しかし、驚くべきことですが、主イエスは、私達とは、全く逆のことを仰っています。ヨハネによる福音書では、復活の主イエスを信じられず疑い迷ったトマスについてのエピソードを記します。トマスは、仲間より一週間遅れで復活の主に出会いそのみ傷を見せられ、「信じる者となりなさい」と招かれて、ようやく「**我が主、我が神**」と信仰を告白しました。それを聞いた主イエスは、「**あなたはわたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。**」(ヨハネ福音書20:29)と仰います。神の御子イエス・キリストを見ることができた人の方が断然幸せな筈。主は何故、「見ないのに信じる人は、幸いである」とおっしゃったのでしょうか。

その答えこそ、冒頭に掲げた32節にあります。「**わたしたちはこの事実の証人であり、また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証しておられます。**」聖霊なる御神は、主イエスキリストを証するお方、主イエス・キリストがどのようなお方かを教えてください方です。復活の主イエス・キリストを見ないで受け入れ信じることは、

このキリストを証する聖霊なるみ神が与えられるから、それ以外にはあり得ません。だから主は「見ないで信じる者達、聖霊を与えられる者達は幸いだ」と祝福されます。この横浜ナザレン教会に集められ、イエス・キリストを「我が主、我が神」と告白する私達もそうです、この上ない愛を注ぐ神の御子イエス・キリストを、聖霊なる御神から知らされ、主に従う道を示され、神に愛され神を愛する幸いに生きる者たち、永遠の神の命に与る幸いを与えられた者たちです。

4 試練の中に働く聖霊

その聖霊を32節では「**神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊**」と使徒達は語ります。しかし、聖霊なる御神は、神なるお方ですから、私達が自由にできる所有物ではありません。私たちが聖霊を自由に使うのではなく、聖霊が私達を導かれるのです。では、聖霊なる御神は、どのようなやり方で私達に主イエス・キリストを証し、知らせてくださるのでしょうか。

今日の使徒言行録に描かれた神様のなさり方から考えることができます。父なる御神は、み使いを遣わして使徒達を牢から助け出すまでのことをなさいますが、不思議なことに、使徒たちが鞭打たれることを止めることはなさいませんでした。大祭司たちが彼らを鞭打たせるに任せたのです。これは人の目にはなんととも奇妙なやり方ですが、天の御神の御心は、使徒たちに苦しみを与えないことではなく、鞭打ちのような痛みと恥を伴う試練を通じ、使徒たちを主イエス・キリストを伝える証人として整える事でした。最後に「**メシア・イエスについて福音を告げ知らせていた**」とある事からも分かります。意外なようですが、使徒言行録では、ここで初めて「福音」という言葉が出てきます。使徒たちは、迫害という試練を通じて証人として整えられ、キリスト・イエスの出来事を福音としてはっきりとらえることができたのだ、とルカは言いたかったのではないか、と思います。

ですから、聖霊なる御神も私達に同じように、試練を通して、主イエス・キリストの愛の深さ、広さ、高さ、大きさを実感させてくださるのではないか、と思います。使徒パウロが愛弟子テモテに次のように書き送っている通りです。「**神が我らに与えられたのは、恐れ of 霊ではなく、力と愛と鍛錬の霊です。**」(テモテへの手紙Ⅱ 1:7)。私達は主イエス・キリストの証人となるべく、試練を通じて、聖霊なる御神の力と愛を与えられます。人を愛せない所でも愛する愛が与えられる、神を信じることができないような時にも、神を神として呼び求める力が与えられるのです。神に従う者として為すべきことが示されるのです。そうして、主イエス・キリストの証人として訓練され、鍛錬され、成長していく、キリスト・イエスに従う者として整えられていく。何度失敗しても、私達の内生きてくださる聖霊なる御神に、聖霊なる御神が示してくださる主イエス・キリストに希望を置いて何度でもやり直すことができます。だから、主は、「見ないで信じる者は幸いである」と祝福されました。それが私達です。

5 使徒的教会

このような生き方を可能としてくださるイエス・キリストの十字架と復活、福音こそ、教会が、次の世代に伝えること。しかし、「自分達の信仰を伝えよう」と私の中心が「自分達」に移った時、教会は教会でなくなり、滅びるしかなくなります。それは、今日の聖書でもラビ・ガマリエルの言葉を通して語られています。「あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。」だからこそ、私達は自分達の思いのままに生きるのでもなく、権力者やこの世の多数派に倣って生きるのでもなく、常に新しく神の御思いを祈り求め、聖霊なる神の御声に耳を傾けつつ、聖書を読み、神を礼拝して生きるのです。使徒達が「人に従うのではなく、神に従わねばなりません」と答えたことを実践するために。「あなた達は大祭司や最高法院の議員たち、テウダやガリラヤのユダになってはいけない、使徒たちのように生きよ」と聖書は私達を招いています。聖霊なる御神はそのために私どもの所に来てくださいます。

ですから、使徒たちのように、神のみ旨を求め、自分達ではなく主イエス・キリストを証し伝えて行く教会を「使徒的教会」と呼ぶのです。天の父なる御神とイエス・キリストは、私達のような社会の中で小さい者たちの群れに聖霊なる御神を送ってくださり、聖書を通じて神が求めておられることを示し、主イエス・キリストの証人として整え、横浜ナザレン教会を使徒的教会へと造り上げてくださいます、今日も明日も明後日も。父なるみ神に感謝し、御名を崇め賛美します。